

カラフルな糸が紡がれる工房

都心から電車を乗り継いで小一時間。小さな里山のふもとに、ツーテーションカラーの一軒家がある。植物に囲まれた玄関のブリキのつぎはぎドアを開けると、不意に真っ黒で毛むくじゃらな生き物が飛び出してきた。

「アメリカン・コッカー・スパニエルとプードルのミックスなのー!」

教えてくれたのは、犬のドードーに負けて元氣いっぱい女の女子、Mちゃんだ。

おとぎ話に出てくるようなこの家は、テキスタイル作家、Aさんの工房兼住



居。カラフルな糸が張られた織り機がずらりと並ぶ一階では、北欧テキスタイル教室を営んでいる。四クラスあるコースには、関西など遠方から通ってくる生徒さんもいるという。

「日本の反物などを手がける教室はあるんですけど、うちみたいに柄ものを織る教室はあんまりないので……」

Aさんが専門とするスウェーデン織りには、自分で描いた絵を布に起こすフレミッシュ織りという技法がある。子ど



もがクレヨンで自由に描いたような柄のラグやスツールマットを見ると、通ってみたいくなるのもうなずける。

「こういうのをつくりたい! って理想を持っていらした方には、それに近づけるように教えて、難しかったら次回は基本に戻る。そういう指導をしています」

デザイン画も自ら描き、糸も自分で染色していく。一本ずつ結んで織るノッティングなど、織り物を中心にしてはいるが、ボンド加工を施し糸を刺していく

タフティングや、ニードルで繊維を絡め固形化していくフェルトリングなど、テキスタイル全般を学ぶことが出来る。

しかしその本格的な内容とは裏腹に、受講風景は至って砕けたものらしい。

「すごく面白いですよ。こっちでお菓子食べながらガッツして話してる人がいっぱい、こっちでは集中してやってる人もいたり。みんな各々で」とAさん。

「いつも笑い声しか聞こえない。何やってんだろう? みたいなの」

そう言って笑うのは夫のTさん。教育施設で企画、運営の仕事をしている。



「目上の方が更年期の話とかでめちゃくちゃわいていて(笑)。二〇代の方や男性もいるので、大丈夫? 押されてないかな? って心配になるんですけど、ちゃんと入って楽しそうにしています」

老若男女が織り物をきっかけに交流できているこの空間を、Aさんはとても愛おしく感じている。

階段途中の異空間
中二階は子どもの秘密基地

そんな環境で育ったせいなのか、長女のMちゃんは、初対面の私にもまったく人見知りをしない。彼女が先頭を切って家の中を案内してくれた。

「おう〜! 中二階に行く〜! ここね、大人が入りにくいかもしれない」

「中二階?」

階段の途中にある小さなアーチ状の門をくぐると、そこにはおもちゃと楽器と絵本に囲まれた子ども王国があった。

「なにこれ、超楽しいね! Mちゃんのお部屋?」



「ううん。違う。友だちが来たときににお布団ひいたり、漫画とか絵本とか読んだりする部屋。ここでグタグタするの好き!」

「二人になりたいときにもいいね」

「うん。ケンカしたときとか」

設計士がつくったこの家の模型を見せたらうんと、ここは独立した中二階というよりも、サンドウィッチのように一階と二階に挟まれた異空間になっている。まるでスパイク・ジョーンズ監督の不条理コメディ映画『マルコヴィッチの穴』に出てくる、天井が低く立ってない7½階にあるレスター社のようだ。扉さえ隠してしまえば、部屋があることに誰も気